

小木の子 われら

校 区 内
全 戸 回 覧

令和3年12月20日発行

ご褒美のあり方

校 長 齋 藤 光 夫

私が学級担任をしていたころの出来事です。

毎学期末、担任が自作した漢字・計算テストを全校一斉に行う学校でした。漢字は何度も、何度も、繰り返し練習させ、本番はその中から50問を選んで出題していました。

ある子どもが1問、小さなミスをして98点を取ったのですが、テストを返したあと、しばらくして私のところにテストを見せに来ました。

「間違えてないのに×になっています。」

テストを見ると間違えていません。しかし、その子の日頃からの練習（止め、はねなどかなり厳しくチェック）の頑張りを知っている私は、採点している際に「これは×を付けなくてはいけない」と判断し、「おいしい！」と思ったことをはっきりと覚えていました。私は、これまでの努力を褒め、1問のミスは悔しいだろうけれど、その僅かなミスを経験して、もっと頑張ろうと思えることは100点以上の価値があると話しました。しかし、その子は涙を流しながら、最後まで自分は間違えていないと言い続けていました。

その後、その子の家族から電話がありました。間違えていないのになぜ×なのかと。

どのような間違いで×にしたかの説明と合わせて、その子の頑張りをお褒めしてほしいと伝えたのですが、そのときの返答は次のとおりでした。

「100点とったら、お小遣いあげるよ、と約束していたのにかわいそうです。」

褒められて嬉しいのは大人も子どもも一緒です。褒美を貰えたら嬉しいのも分かります。しかし、褒美ほしさの行動はどんな結果を生むのでしょうか。もっと大きな褒美を求めるようになったり、褒美がなかったら行動しなくなったり…。「〇〇したらご褒美をあげる」という約束は、褒美をエサに子どもの行動をコントロールしていることにならないのでしょうか。また、この習慣化は、親子の人間関係を崩壊させる危険性があるとも言われています。物的な欲求を満たす褒美の効果は一時だけです。今年一年、様々なことに努力し、成長してきた姿を見取って褒めてあげるといふ『自己肯定感を高め次へとつながる言葉がけのご褒美』を大切をお願いします。来る年が皆様にとって良い年でありますように。